The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	17世紀初頭のチリにおける「人食い」 : アロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラの見たマプーチェ（下）
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 1994, 18, p. 61-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97927
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

17世紀初頭のチリにおける「人食い」

― アロンソ・ゴンサレス・デ・ナヘラの見たマプーチェ ― (下)

千　葉　　泉

〈(上)から続く〉

3．残酷な「人食い」

さて，こうして「たくましいマプーチェ」といったイメージを否定したゴンサレス・デ・ナヘラは，次にマプーチェの性格をより積極的な形で否定する作業に取りかかる。「チリのインディオの残酷さ」と題された第1巻第4の報告がその部分である。この報告では主に，マプーチェが戦闘において捕虜にしたスペイン人をいかに残虐非道なやり方で死に追いやるか，ということが説明される。

この部分についてゴンサレス・デ・ナヘラは，自分のチリ滞在中に起きたことを含め，自分の直接知るところとなった事柄に限るとことわった上で，叙述を始める[González de Nájera 1889:53]。

まず，自らチリに連れてきた小尉や多くの神父たちの殺害に触れたあと，ゴンサレス・デ・ナヘラは，マプーチェたちが例外的に捕虜を生かしておく場合を説明する。すなわち捕虜が女性である場合（奉仕させるため），戦闘援助するべくインディオ側に鞍替えした者の場合，武器製造に役立つ鍛冶職の場合などである。要するに，何らかの形で自分たちの利になる場合だけ生かしておくのであって，決して慈悲心から生かしておくのではないことを彼は力説する[*Ibid.*:54][(1)]。

こうして，捕虜を生かしておくという「例外」を処理した上で，ゴンサレス・デ・ナヘラは，本題であるスペイン人捕虜殺害について次のように述べる。

「この敵どもは，捕虜がいたいけな年令の者である場合を配慮したり，可哀相な哀願の声を聞いたりしてどんなに同情にかられるはずであっても，これに死を与えるだけで満足するような輩ではない。というのは，この上

なく過度に残酷な仕打ちをすることで，彼らの快感は大いに倍加するので，多くの捕虜はその目の前で体から切り取った肉片を半焼きにして食って行き，その後でもう屍となった体に残った肉片を残さず食ってしまうのである。そして終には，生きた状態であろうと死んだ状態であろうと我々の痕跡を残すまいという，怒りに満ちた飽くことのない彼らの渇望はとても大きいものであるため，骨まで焼いて粉末にし，酒に混ぜて飲みほしてしまうのだ。」[*Ibid.*:54]

こうして，マプーチェがスペイン人捕虜を残酷の限りを尽くして殺し，その肉を食うという点を強調した上で，次にゴンサレス・デ・ナヘラは，どのようにマプーチェがわざわざ通常以上に長い時間をかけ，楽しみながらスペイン人捕虜を殺害するかをより詳しく説明するため，戦勝後に開催されるとする祝宴の場を描いて見せる。以下，その部分を要約してみよう。

木々に囲まれた野原の中央に，彼らが「カネラ」とよぶ木を植え，上方の枝にはスペイン人の首をぶら下げる。木の回りには円形に台が置かれる。台の上にはカシーケ衆や戦闘を指揮する隊長衆が並び，その回りに一般の男女が位置する。列席者の中にはスペイン人兵士の服や「神父の衣服」をまとうものもいる。

太鼓と「スペイン人の足の骨で作った笛」の奏でる哀しげな音に合わせて踊りが始まる。音楽に合わせてカシーケ衆が木の枝に結んだ毛糸を引っ張ると，枝に吊されたスペイン人の首もゆらゆらと揺れる。

若者が踊り手に配って回る酒を入れたコップの中には「聖杯」もある。

祝宴が特に盛り上がるのは生きた捕虜がいる場合である。捕虜は裸にして木の根元に縛りつけ，しかめっ面をしたりおどけて見せたりしてからかう。こうして十分に楽しんだ後，捕虜の受難は始まる。

まず，捕虜を捕獲したインディオがその手足，肉の一部を切り取ったり，好きなところを突き刺したりする。次に他のものが続き，体をバラバラにし，焼いて食っていく。捕虜の目の前で切り取った手や腕を焼き，彼に与える。捕虜が虫の息になったところで，心臓をえぐり出し，カシーケ衆と隊長衆の間で回し，かじり，血をしゃぶる。

また，生きたまま捕虜の皮を剝いだり，その他の新種の拷問法を考案しては試し，捕虜の痕跡が残らぬように，肉を食い，骨を粉にして飲み乾してしまう。

こうした酒宴の席にはスペイン人の顔の部分を乾かして作った仮面をつけてくる者もいる。頭蓋骨で杯を作り，さまざまな色に塗って酒を飲むこともある。また，手の部分を乾かして手首のところで棒にしばり，空洞に石ころを入れて，踊りの際にタンバリンのように鳴らすものもいる(2)。

こうした宴会の叙述では，ぶらさがるスペイン人の首，そしてスペイン人の骨で作った笛のかなでる哀しげな音，捕虜の虐待，人食いといった，あくまでも残酷でおどろおどろしいイメージの中，聖職衣や聖杯の「世俗的」目的での利用という，「キリスト教に対する冒瀆」といったイメージも見え隠れしている。

さらにゴンサレス・デ・ナヘラは，チリ王領全土のスペイン人に知れわたっているとする残酷な殺害の例を列挙していく。

ボールのように体を丸く縛られ，「マス釣り」に見立てて川に沈められては上げられ，からかわれながら殺された隊長の例。捕虜になっていた父親が逃走したために，復讐として十字架にはりつけにされ，体を斬り刻まれて食われたスペイン人の子供の例[*Ibid.*:57-58]。

また，彼の近習であったアテナスの例も挙げている。アテナスを十字架にはりつけたインディオたちは，笑いながら時間をかけてその肉片を切り取り，焼いて食っていく。アテナスは嘆き懇願するが，彼らはかえってこれをからかうだけである。アテナスが死にそうになると胸を切り開いて心臓を取り出し，生暖かい血をすすり空中に吹き掛ける。こうしてアテナスは殺された，とゴンサレス・デ・ナヘラは述べている[*Ibid.*:58-59]。

最後に，いわば「人間イヌ」の刑とでも呼ぶべき例を示している。スペイン人側に逃亡したインディオ女を取り戻したインディオは，自分の土地へ戻る途中女を裸にし，腹を切り裂いて腸を引き出す。そしてこれを「首ひも」に見たて，彼女を鞭打ちながら，キリスト教徒のもとに逃げた「イヌ」と罵倒の言葉を浴びせ，死ぬまで坂を登らせたというのである[*Ibid.*:59-60](3)。

以上のように，さまざまな残酷な殺し方を列挙した上で，マプーチェがかくも慈悲心に欠け，残虐であることを認めようとしない者がいることは驚くべきことだと指摘し，次のようにゴンサレス・デ・ナヘラは結論付ける。

「……これらの野蛮な者たちが生れつき血を流したり人肉を食することを好むこと，そして彼らのあらゆる残虐行為を考えれば，彼らを残忍な獣と呼んでも十分ではない。というのは，獣には論理と理性の光が欠けるため，習慣的に肉食を行なう際に同情を感じることができないからだ。また彼らの肉食行為は，自らの生存維持と保全のために自然に身についたものであり，同じ種同志で互いに食い合うということはない。しかるに，この人間たち（もし彼らを「人間」と呼ぶにふさわしいとしての話だが）は，同じ人間の肉と骨を食うほどに残酷であるだけでなく，彼らが苦しむのを見て楽しむため，できる限り余暇の時間を費やして，苦しく長引く処刑法を考案して楽しんでさえいるのだ。したがってこの点でも，獣以上に残酷だといえる。なぜなら，獣は飢えを充たすだけで満足するからだ。」[*Ibid.*:60]

こうしてゴンサレス・デ・ナヘラは，マプーチェが獣以下の「人食い」であり，「スペイン人を」いかに残酷なやり方で殺害してきたかを徹底的に強調してみせる。

マプーチェに対するこうした否定的な認識が，冒頭でのべた肯定的・英雄的なマプーチェ像とはかなり異なるものであることはいうまでもないだろう。また，自ら捕虜として生活した時の実体験をもとに，同じ17世紀前半にあたる1629年当時のマプーチェ社会を描いた前述のピネーダ・イ・バスクニャンの記録に見られるマプーチェのイメージとも極めて異なるものになっている。

例えば，1629年のラス・カングレーハスの戦いの際，筆者とともに捕虜となった若いスペイン人兵士の犠牲の場面が描かれている。この場面を自ら目撃したピネーダ・イ・バスクニャンの叙述は，次の点で明らかにゴンサレス・デ・ナヘラの叙述とは異なっている。すなわちこの叙述では，勇敢なマプーチェのカシーケが捕虜のスペイン人兵士に命じ，棒切れをスペイン人の勇者に見立てて，一本ずつ地面に掘った穴に埋めさせてゆくなど，儀式的な側面が強調されていることである。また殺害の方法はいとも簡単で，こん棒で頭部を一撃して，即死させるというだけである。唯一「人食い」と言えそうな箇所といえば，心臓をえぐり取って，カシーケ衆の間で

血をすすり，その後これを切り刻んで食べるという場面があるが，やはり，心臓にタバコの煙を吹きかけるなど儀式的な印象が強い。体全体を切り刻んで食べるとか，犠牲者をからかって殺す過程を楽しむ，といった残酷さを強調したイメージはそこにはない。一方で，こうした犠牲の際に捕虜に同情するインディオがいることも指摘されている[Pineda y Bascuñán 1989:37-42]。

なお，その他の点でもピネーダ・イ・バスクニャンの叙述にあらわれるマプーチェのイメージは，肯定的な印象が強い。スペイン人捕虜の待遇について言えば，筆者が直接関わりあったマプーチェのカシーケ衆は，むしろ「情に厚い」といったイメージで描かれている。また宗教の点でも，キリスト教に対して真摯な興味を示し，筆者に祈禱の教えを熱心に乞う子供たちの姿が印象的である[*Ibid.*]。こうした点でもゴンサレス・デ・ナヘラの叙述とは対照的なマプーチェ像が描かれているといえるだろう。

このような叙述を行なったピネーダ・イ・バスクニャンは，スペイン人による虐待が原因であるとしてマプーチェの反乱を正当視し，その奴隷化に反対する立場を取っていた。同じ軍人でありながら，正反対の立場に立つピネーダ・イ・バスクニャンの描くマプーチェのイメージが，捕虜犠牲の場面を始めとして，ゴンサレス・デ・ナヘラの描くイメージとこれほど異なるものになっていること，しかも彼が実体験に基づいて叙述を行なっていることは示唆深い。

一方，この部分に関するゴンサレス・デ・ナヘラの叙述にも，自分が直接報告を受けたとする例や自分の身近な人物の例，さらには「周知の」例を挙げたりすることで，説得力を増そうという努力が見られる。ただ実際に自分の眼で目撃した，という形になっている部分はほとんどないところから，報告を受けるプロセスで，あるいはゴンサレス・デ・ナヘラ自身が記録する際に誇張，あるいは脚色が加えられた可能性も否定できないだろう。

もしそうだとすれば，ゴンサレス・デ・ナヘラが描いた「残酷な人食い」というマプーチェ像は，単に彼の個人的な想像の産物だったのだろうか。

しかしながら，例えばマプーチェの「人食い」の習慣について記述しているのはゴンサレス・デ・ナヘラだけではない。実はすでに征服当初から

マプーチェの「人食い」に関して叙述した記録が見られるのである。

ペドロ・デ・バルディビアに随行してチリ征服に参加したブルゴス出身の兵士ヘロニモ・デ・ビバルが，1558年に書き上げた記録に「チリ諸王領の記録（Cróncia de los reinos de Chile)」がある。バルディビアの時期からウルタード・デ・メンドーサ総督期の初期までの出来事を年代記的に叙述しつつ，チリ各地方の民族の習慣や動植物をも紹介したこの記録にも，マプーチェの「人食い」に関する記述は5箇所見られる。ゴンサレス・デ・ナヘラの叙述と比較するため，以下これらの箇所を見てみよう。

第一の例は，1550年，アラウコ地区ラバピ岬における戦闘の際，ビバルが目撃したとする出来事である。

「……（彼らは）我が方の5名の者を殺害し，我々の見ている前でこれらをバラバラにして食ったのだが，我々は彼らを救うことができなかった。」[Vivar 1988:255]（カッコ内筆者補足，以下同様）

第二の例は，1554年にコンセプシオンから5レグア離れたアンダリカンの地付近での戦いに関する叙述である。

「(スペイン人たちは）各々が好き勝手な方向に逃げようとしてやみくもに進み，敵の手に落ちることとなり，バラバラにされた。そして（インディオたちは）既に述べた例の投げ縄で大いなる損害を与えたのだ。そして（インディオたちは）彼らを食べたのである。したがって，この野蛮な者たちはこれらのスペイン人たちの墓場となったといえるだろう。」[*Ibid.*:298]

なお，この例はビバルが目撃したことにはなっていない。

以上二例で，食われる相手はスペイン人ということになっているのに対し，第三の例はインディオ同士の「共食い」の例である。バルディビアの後を継いだペドロ・デ・ビジャグラ総督は，1554年インペリアルに本営を置き，周囲の原住民に攻撃を繰り返す。

「それ以来，（インディオたちは）スペイン人が知る限りかつてないほ

どに共食いを始めた。こうしてスペイン人は出かける先々で，既に述べたように，肉屋のようにインディオの男や女の肉片に出くわすのであった。なぜなら何人かの主だったインディオたちは60〜70人のインディオを集めて道を行き，食べる目的で人を捕まえていたのだ。そして，やってくる者たちは子供であろうと大人であろうと逃がさず殺すというわけで，この野蛮な者たちの間で行なわれていた破戒行為は見るに忍びなかった。」[*Ibid.*:314-315]

この例もビバルが目撃したことにはなっていない。

第四の例も，1554年インペリアル地区において起こったとされる「共食い」の叙述である。

「そしてインディオたちは……都市の回りの畑に実っていた食糧を焼き始めた。空腹からスペイン人たちがその土地から去っていくだろうと考えてのことだったのだが，結局彼らにとって裏目に出ることとなり，再び反乱を始めた。…… 食糧の必要があまりにも大きくなったところもあり，インディオたちは共食いをするに至った。」[*Ibid.*:317]

このように「共食い」の一因として食糧不足の事情を説明した後，食糧不足よりもむしろ「悪癖」から「共食い」をしていた者もあると指摘し，1才半の息子を焼いて食べたインディオ夫婦，自分の太股の肉を食べたインディオ女，妻を食べた夫，夫を食べた妻，さらには，肉屋のように肉片がつるされ，売られていたインディオの家の例も挙げられている。また「共食い」流行の背景として，インディオたちの間に広まっていた復活信仰も説明されている[*Ibid.*:317-318]。

ただし，この例もビバルが直接目撃したことにはなっていない。

そして最後は，1557年にアラウコ地区の南に位置するミジャラプエ地区でビバルがインディオたちから聞いたとする例である。

「ここでもう一人のインディオについて，というより3人の兄弟と母親，父親を皆食ったことから，これらの者の墓場について語るといった方がよかろう。彼自身の告白からこう言うのではなく，他のインディオたちがそう語ったのだが，彼らは今だにこのインディオを恐れ，逃げ

ていたのである。(そのインディオは) 自分の母親の肉よりうまい肉にはお目にかかったことがないと言っていたそうだ。このようにインディオたちはまだ共食いをしているのである。」[*Ibid.*:336]。

さて，以上全部で5例のうち，一例しかビバル自身が直接目撃したということになっていないこと，したがって特にこれ以外の4つの叙述については，何らかの形でビバル自身や情報提供者の想像，あるいは誇張が混じりこんでいる可能性も大いに考えられることに注意しておこう。

「人食い」に関するビバルの叙述の特徴の一つは，始めの2例のみ食われる相手がスペイン人になっていること，そしてこの両例とも，要するにバラバラにして食べたというだけの，実に簡潔な叙述に終始していることであろう。

それに対し，残りの3例では食われる相手は同じインディオであり，この場合はもう少し詳しく，捕獲の方法，具体的に誰を食うのかといった点，あるいは，食糧不足，悪癖，復活信仰など，人肉食の原因なども説明されている。ただし，人食いの過程そのものは実に簡潔で，要するに人を食うということに終始している。したがって，殺害の過程を楽しむといった，残酷さを特に際立たせるような印象は感じられない。

こうしたビバルの叙述を，ゴンサレス・デ・ナヘラの叙述と比較してみよう。まず，食糧不足や「悪癖」を原因とする「インディオ同士の共食い」といったニュアンスが強いビバルの叙述に対し，ゴンサレス・デ・ナヘラの叙述では，「憎悪や敵対心」から「スペイン人を食う」という点が強調されている。

次に，ビバルの叙述の場合「人食い」の過程そのものは実に淡々としているのに対し，ゴンサレス・デ・ナヘラの場合，いかにして殺す過程を楽しむかといった点が強調され，はるかに残酷なイメージを帯びている。

以上の考察から，次のような指摘ができるだろう。

第一に，「マプーチェ＝人食い」というイメージは，ゴンサレス・デ・ナヘラが個人的に創造したものではなく，征服当初から持たれていたこと。そして，それにもかかわらず，今日のチリの非マプーチェによるマプーチェ認識にはこうしたイメージはほとんど見られず，いつの間にか喪失していったということがある。

第二に，同じ「人食い」の叙述でも，ビバルとゴンサレス・デ・ナヘラの叙述の間には，「スペイン人に対する憎悪や敵対性」あるいは，食う際の「残酷度」といった点で大きな相違が見られることである。

こうした相違が出てくる理由を推察するため，両記録が書かれた時代背景，目的を比較してみよう。

ビバルの記録は1558年に書かれている。1553年のバルディビア殺害に始まるマプーチェ大反乱ののち，1557年にはラウターロが破れ，1558年には，複数の地区の戦士を統括する戦時指導者「トキ」であったカウポリカンも捕えられ，殺される。反乱の際に破壊された都市や要塞も次第に再建され，新しい都市も建設されてゆく。つまり1558年は，マプーチェの反乱の苦い経験を経ながらも，軍事的評価の高いウルタード・デ・メンドーサ総督のもと，チリ南部のスペイン人植民地社会が一応復興の途上にある時期であったといえるだろう。一方，「ラ・アラウカーナ」が発表される前であったので，肯定的・英雄的なマプーチェ像を意識的に打破する必要も当然なかった。

このような状況のもとで書かれたビバルの記録は，バルディビアおよび彼に随行してチリ征服に参加したスペイン人たちに関する「英雄的な事実」を年代記的に記述することを主な目的としており，マプーチェに対する戦略を提起するといったような意図はなかった[*Ibid.*:41]。

それに対しゴンサレス・デ・ナヘラの報告が書かれた17世紀初頭は，すでに述べたように，1598年に始まるマプーチェ一斉蜂起を経て，ビオビオ川からトルテン川にかけての地域はマプーチェが実質的に支配権を回復してしまったという状況にあった。そして彼は，こうした状況が生まれたのは，殺されたオニェス総督が捕虜の解放など平和的な手段を通じてマプーチェ統合を追求していたためであると考え，マプーチェに対し徹底的に強硬的な戦略で対処するべきだという立場に立っていた。

一方で，スペイン本国では「ラ・アラウカーナ」の影響で，スペイン人による征服そのものを否定するわけではないものの，一方でマプーチェの反乱を美化するともとれる「英雄的なマプーチェ」像も流布されていたと推測される。こうしたイメージが，対マプーチェ強硬策を主張する上で都合の悪いものであったであろうことは想像にかたくない。

こうした状況を考慮すると，ゴンサレス・デ・ナヘラの呈示した「マプ

ーチェ＝スペイン人に対して徹底的に残酷な人食い」といったイメージが，当時のチリ植民地支配層の世論を背景に，王室に対して極めて強硬的な対マプーチェ戦略を提案するというゴンサレス・デ・ナヘラの目的に呼応するものであったことは明白であろう(4)。

ここで最後に，黒人奴隷の導入の奨励提案に関し，マプーチェの性格についてゴンサレス・デ・ナヘラが述べている部分に触れておこう。

すでに見た通り，ゴンサレス・デ・ナヘラは反乱中のマプーチェを徹底的に攻撃して殺害し，捕虜とした者を奴隷として放逐するだけでなく，既に奴隷としてチリ中北部に滞留しているマプーチェをも域外へ放逐することを主張し，インディオに代替する労働力として王室主導の形で黒人奴隷を導入することを積極的に提案している。

こうした提案に関連し彼は，第5巻第2部において，主にブラジルで働く黒人奴隷の特徴とマプーチェの特徴を比較している。そこで興味深いのは，カトリック教に対する態度，主人に対する忠誠心，性格，酒癖，身だしなみ，労働意欲等々，あらゆる点で黒人奴隷の性格がさかんに称揚される一方で，マプーチェの特徴はことごとく批判されていることである[González de Nájera 1889:260-268]。

労働力の問題は，原住民の労働力を利用してきたチリ中北部在住のスペイン人支配層にとって重要な事項であった。したがって，単に戦争捕虜だけでなく，既に奴隷として中北部に滞留しているインディオをも域外に放逐することを王室に対して主張するためには，マプーチェがいかに信用がおけず，労働力として魅力がないか，ということを強調しておく必要が当然あっただろう。したがって，黒人の優秀性とマプーチェの劣等性を説くことにより，労働力としてのマプーチェに対する配慮を切り捨てる。このようにして，マプーチェの大量殺害と域外放逐という最強硬策を主張するための最後の障害を取り除く。こうした意図が，この部分の叙述の背景には明らかにあったものと思われる。

以上の考察をまとめよう。ゴンサレス・デ・ナヘラの叙述には，「英雄的マプーチェ像」から大きく外れる「残酷な人食い」といった極めて否定的なイメージのマプーチェが描かれている。こうしたイメージは，ほぼ同時代の実体験をもとに，戦争捕虜インディオの奴隷化に反対する立場に立っていたピネーダ・イ・バスクニャンが描いた肯定的なマプーチェのイメ

ージとも大きくくい違っている。

「人食い」のイメージは，ビバルの記録からもわかるとおり征服当初から記録されていた。しかし，マプーチェ大反乱後間もない17世紀初頭に書かれたゴンサレス・デ・ナヘラの報告には，単に「人食い」というだけでなく，特に「スペイン人の捕虜」を，あらゆる残酷な形で虐待・殺害し，骨まで食べてしまうという，いわば「拡大修正」された「人食い」イメージのマプーチェが描かれている。

こうした否定的なマプーチェ像は，最後に「労働力として黒人奴隷にはるかに劣る」というイメージを付加することによって完成する。

ゴンサレス・デ・ナヘラの描いたマプーチェに関するこのようなイメージが，マプーチェの実態をどの程度反映したものか，あるいは人為的に歪曲したものかは別として，当時の植民地支配者層の世論を背景に，マプーチェの大量殺害と域外放逐を含む極めて強硬的な性格の強い対マプーチェ戦略を，王室に対して提案するというゴンサレス・デ・ナヘラの目的に呼応するものであったことは明白であろう。

〈注〉

(1) マプーチェによるスペイン人女性捕虜に対する苛酷な待遇については，[González de Nájera 1889:65-66] 参照。

(2) 以上祝宴については，[*Ibid.*:54-56] 参照。

(3) 今日マプーチェの間で，「ウインカ＝非マプーチェ（特にチリ人）」に対して用いられる罵倒の言葉の一つに，「ウインカ・トゥレウア（winka trewa）」（ウインカのイヌ野郎）という表現がある。

(4) 例えば，戦闘で捕虜にしたインディオの奴隷化を認める勅令の発布の過程で大きく影響を与えた文書の一つにメルチョール・カルデロンの論文がある。1599年にサンティアゴ市の大聖堂で開かれた有識者の集会で承認され，ペルー副王を経由してスペイン国王フェリペ3世のもとに送付されることになるこの論文には，反乱を起こしたチリのインディオの奴隷化を正当化する根拠が列挙されている。その中には，多数のスペイン人兵士や神父の殺害，聖職衣・聖杯・聖壇の冒瀆，あるいは人肉，人骨粉の飲食，といった事項も根拠として含まれている[Jara 1990:195-197]。

なお，ゴンサレス・デ・ナヘラは，インディオの奴隷化やその殺害といった強硬策を正当化する「反駁不可能の理由」として，第5巻第1部で，インディオが，かつてキリスト教に改宗したにもかかわらず，反乱を起こし「悪癖に満ちた」生活に浸っているという点を指摘している[González de Nájera 1889:250]。ただ，こうした理屈を側面から補足するためにも，「キリスト教に対する冒瀆」といった点も含め，「スペイン人に対して徹底的に残酷な人食い」といったイメージを展開しておくことが効果的であることは疑いがなかろう。

結論

今日チリにおいては原住民マプーチェに対して,「征服者スペイン人に対して勇敢に戦い，自由を守った不屈の民」という英雄的なイメージが，党派を越え典型的なイメージの一つとして持たれ，さまざまな形で記録され，利用されている。こうしたイメージの発端は，征服当初エルシージャによって書かれた叙事詩「ラ・アラウカーナ」においてすでに見られた(1)。

しかしながら，マプーチェに関して，こうした英雄的イメージだけがチリの歴史を通じて記録されてきたわけではない。

16世紀末から17世紀初頭にかけて起こったマプーチェ一大蜂起の直後,マプーチェに対する戦闘の最前線に位値する要塞で戦闘を指導した軍人ゴンサレス・デ・ナヘラが書いた報告には，英雄的なマプーチェ像は見られない。そこに記録されたマプーチェは，体力的にも気力の点でもスペイン人以下,「酒飲みの怠け者」であり，その一方で，スペイン人捕虜に対してありとあらゆる残酷な仕打ちでこれを殺害する「人食い」である。「人食い」のイメージはビバルの記録からもわかるように，征服初期の時代から記録されてはいたが，ゴンサレス・デ・ナヘラの報告では，特に「スペイン人」を，極度に残酷な形で殺して食うという点が強調されている。

つまり，一方でエルシージャが描いたような「たくましい」「勇敢な」インディオといったイメージは否定され，ビバルの記録に描かれていた「人食い」のイメージは，スペイン人に対する残酷さを極端に強調する形で，いわば「拡大修正」されて描かれている。

ゴンサレス・デ・ナヘラの描いたイメージが当時のマプーチェの実態をどの程度反映しているか，あるいはどの程度歪曲したものかを判断することは容易ではないが，少なくとも次のことはいえるだろう。

マプーチェの一斉蜂起によりビオビオ川からトルテン川までのマプーチェ領域の支配権を事実上失った当時，チリ植民地社会支配層の大部分は，戦争捕虜の奴隷化を含む対マプーチェ強硬論を唱えていた。こうした世論を背景に，ゴンサレス・デ・ナヘラは，戦略的な観点から，単なる奴隷化ではなくマプーチェの大量殺害と域外放逐を含む最も強硬な提案を王室に対して行なうという目的で同報告を執筆した。

以上のような事情を考えると，ゴンサレス・デ・ナヘラの記録に描かれ

たマプーチェ像が，こうした目的に呼応するものであったことは容易に理解できるだろう。 ― マプーチェは「ラ・アラウカーナ」などの影響で当時スペインで広まっていたような「勇敢で無敵の民」などではなく，体力の点でも勇気の点でもスペイン人に劣る「怠け者」にすぎない。戦略さえ修正すれば，奴らを征服することは可能なのだ。スペイン人捕虜に対する奴らの残虐極まりない仕打ちを見てみろ。奴らは獣以下の「人食い」そのものではないか。和平方針でこれを安定的に支配しようなどとは無駄なことだ。境界線を固めた上で奴らを片っ端から殺していき，捕獲したものはすでに奴隷となっているものとともに国外に追放するべきなのだ。そうすればチリにおける平和は達成できるし，原住民の労働徴発が禁止されて労働力不足に悩むペルーのエンコメンデーロたちにでも売り払えば一石二鳥ではないか。チリにおける労働力が不足すると心配する者があるかもしれないが，原住民よりもあらゆる面でずっと優れた黒人奴隷をその代わりに導入すればいいではないか。 ― ざっとこのような論理がゴンサレス・デ・ナヘラの叙述には流れているように思われる。

要するに，ゴンサレス・デ・ナヘラの描いたマプーチェ像に，どの程度想像，歪曲，あるいは誇張があったかは別にして，当時の植民地社会支配層の意識を背景に，極めて強硬的性格の強い戦略を王室に対して提起するという彼の目的に呼応するものであったということはいえるだろう。

この意味では，同じ17世紀前半の経験をもとにしながら，しかも同じ軍人でありながら，正反対の立場に立つピネーダ・イ・バスクニャンの描くマプーチェ像が，ゴンサレス・デ・ナヘラの描いたマプーチェ像とは逆に極めて肯定的なイメージのものになっていることは示唆深い。

以上から，今日チリの非マプーチェの人々の間に一つの典型的なイメージとして定着し，さまざまな形で記録され，利用されている「英雄的」マプーチェ像は，決して植民地時代から今日まで一貫した形で記録されてきたのではなく，それぞれの時期に，それぞれの時代背景のもと，特定の目的に呼応するようなマプーチェのイメージが記録され，利用されてきた可能性が浮かび上がってくるだろう。

例えば，19世紀初頭の独立戦争の時期，独立派の軍人たちは，スペイン人に対するマプーチェの戦いを自らの戦いの前例と考え，マプーチェを極端に理想化した形で描いていた。しかしながら実際に「当時のマプーチェ」

が取った行動は，こうした独立派の軍人の意識を見事に裏切るものであった。なぜなら，マプーチェの大半の集団は，王党派に協力する形で参戦したからである。

独立戦争当時，独立派やその敵である王党派が，それぞれマプーチェに対してどのようなイメージを抱き，どのような目的でこうしたイメージを利用したのか，そしてそれぞれの派が当時の社会的コンテクストや同時代のマプーチェの実際の行動に直面し，どのようにそのイメージを保持，あるいは変化させていったのか，といった問題については稿を改めて検討したいと考えている。

また独立後19世紀中葉から，農牧産品輸出の飛躍的な拡大を背景に，非マプーチェ・エリート層の間でアラウカニーア地域植民の必要が論じられ，1880年代の初頭までに同地域は占領される。そしてこれ以降，マプーチェは長期に渡って保持してきた土地の大部分を剝脱され，狭く痩せた土地に追いやられてゆく。

独立後のこうした社会的コンテクストの大きな変化の中で，非マプーチェ・チリ人によって記録に書かれたマプーチェのイメージがどのように変化し，どのような目的で利用されていったのか，といった問題についても，今後扱っていきたいと考える。

〈注〉

(1) 「ラ・アラウカーナ」には邦訳に，アロンソ・デ・エルシージャ・イ・スニガ著，『ラ・アラウカーナ(第一部)』，吉田秀太郎訳，大阪外国語大学学術研究双書5，1992年，がある。

なお，こうしたいわば公式のイメージと並んで，一部の非マプーチェ・チリ人，特に日常的なレベルでマプーチェと接触を持つチリ南部農村部の一部の住民などの間で，「今日のマプーチェ」に対し，「怠け者，酒好き，計算高い，ケンカ早い」といった否定的なイメージが持たれていることも事実である。今日のマプーチェに対するこうした否定的イメージについては今後の研究テーマの一つとしたい。

参考文献

千葉　泉,「チリのマプーチェ：1550年－1641年，スペイン人に対する抵抗と同化」*Estudios Hispánicos*, No. 16 所収，大阪外国語大学イスパニア語研究室発行，1991年。

Ercilla y Zúniga, Alonso de, *La Araucana*, Editorial del Pacífico, Santiago de Chile, 1970.

エルシージャ・イ・スニガ，アロンソ・デ，「ラ・アラウカーナ（第一部）」：邦訳，吉田秀太郎，大阪外国語大学学術研究双書5，1992年。

González, Juan I. y López, Rafael A., *El pueblo mapuche: presente y futuro de una raza*, Santiago de Chile, 1989.

Jara, Alvaro, *Guerra y socieded en Chile*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1990.

Jara, Alvaro y Pinto, Sonia, *Fuentes para la historia del trabajo en el reino de Chile, Legislación, 1546*－1810, Tomo I, Editorial Andrés Bello, Santiago de Chile, 1982.

Nájera, Alonso González de Nájera, *Desengaño y reparo de la guerra de Chile*, Imprenta Ercilla, Santiago de Chile, 1889.

Pineda y Bascuñán, Francisco Núñez de, *Cautiverio Feliz*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1989.

Vivar, Jerónimo de, *Crónica de los reinos de Chile*, Historia 16, Madrid, 1988.

参考レコード

インティ・イジマニ,「チリよ永遠に：Ⅱ 自由をめざして」，音楽センター，レコード番号CFD-0002.